
オレとうさぎと時々アネキ

福壱柚

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

オレとうさぎと時々アネキ

【Nコード】

N6270E

【作者名】

福壱柚

【あらすじ】

男子校に通うオレこと藤岡涼はひょんなことから学園一イケメンの先輩、隼海生を助けてしまって・・・目指すは、ドキドキラブコメ&ギャグです。興味のある方はぜひ。。。

出会い＋大人の階段

拝啓、親愛なる姉上サマ。

毎月毎月オレ主人公の腐れ小説を都会に一人暮らししているオレの所にわざわざ送っていただきありがとうございます。

お礼を申し上げると共に、姉上の弟として生まれてきたことを悔やんでいます。

前置きが長くなりましたが、お元気ですか？

オレは元気です。

前の手紙に姉上は『彼氏できた？』と言っていましたがおレは男です。『彼女』は出来ても『彼氏』を作る趣味はありません。

またまた話がずれましたね。まったく、誰のせいなんだか。

あ、決して姉上のことじゃありませんよ。決してね……。

高校はとてもたのしいですよ。

最近、調理クラブで先輩にほめられたばかりです。

今度帰ってきたときは姉上の大好きな『プリン』をバケツに作っておくので楽しみにしてください。

最後に。

幽霊だと思った。

こんな夜中にしかも大雨の日、傘も差さずにずぶぬれになっているなんて。

性別は男、制服がオレと同じ高校でたぶん先輩。
ベンチに座ったままピクリとも動かない。

オレはぎゅっと傘を握って近づいた

「あの・・・大丈夫ですか？」

すつと先輩に傘を傾ける。

ポタポタと先輩の頭から雨がしたたり落ちる。

制服の濡れ具合から、かなり前からいたと思う。

「死んでないですよ・・・ね？」

顔を覗き込もうとしゃがみこむと薄く先輩が口を開いた

「かつてに殺すな」

声が枯れていて聞き取りにくかったけれど、一応死んでなかったようだ。

オレはほっとして緊張していた体を戻す。

「お前、誰？」

「オレ？あ、すみません。藤岡涼ふじおかりょうって言います」

「・・・リヨウ」

「あの、先輩の名ッ！！！！！！」

ユラリと先輩の体が揺れる

傾いた体をオレは反射てきに受け止めた

「だっ大丈夫ですか！？つか熱い・・・」

「すまん・・・なんでもッない」

ぐいっとオレを押しのかけて立ち上がろうとする。
雨はいつのまにか晴れて、辺りに光が差し込む

「なんでもなくないです！！オレの家ここから近いんでそこで少し休んで下さい」

「だが・・・」

「行くんです！！！！！！！！」

ためらう先輩を強引に自分の家に引きずるオレ
ポタンと一つ先輩の髪から雨が落ちた

・

出会い＋大人の階段（後書き）

こんにちは＾＾

今度の作品は長続きするようにながらぶるのでよろしくおねがいします。。。

出会い+2

「うーん・・・。ちょっと熱がありますね」

「そうか？・・・そういえば体が熱いような・・・」

「ちょッ、自分の体ぐらい自分で把握して下さい」

ひえぴたを先輩のおでこに貼って適当に布団で寝かす。

オレって本当におひとよしだな・・・。

いくら、学校の先輩にあたる人だからって一応見知らぬ人を自分の家に招きいれてるんだから。

てか、この先輩めちやかっこいい・・・。

よく見てみると鼻の筋が通っていて、少し濡れてる髪が色っぽくて、メガネが妙にマツチしてて・・・
ってオレ、ナニ考えてるんだよッ!!!!!!!!!!!!!!

「藤岡・・・だっただけ？一年生？」

「あ、違います。二年生です」

オレってそんなに幼く見えるのか？

「転入生？」

「そうなんですよ。先輩って詳しいんですね。二年生の人数が把握できるなんて」

「イヤ、だってオレ二年だし」

は？オレと同年い？

ありえないッだってオレより背高いし・・・大人っぽいし

「やっぱり、三年に見えた？」

「うん」

目の前の先輩だと思ってた男は苦笑いをした。

「じゃあ、オレの名前は知らないな」

「え？学校に入ればみんな知ってるの？」

ニヤリと笑う。

オレは不覚にも一瞬その姿が色っぽいと思ってしまった。

男は起き上がると隣に座っているオレを押し倒した

「うわっ、なにすんだよ」

「知ってるよ、みんな。そオレの名前を知らない奴なんて」

「だ、誰か一人ぐらい知らない奴いるんじゃないか？」

この体勢が恥ずかしくて、オレは話をそらす
身をよじって逃げようとするが、体格の差なのかビクともしない。

「そうだな……。ああ、いるとしたら」

男がオレの唇をすうつとなぞる
ゾクゾクとオレの仲でなにかが駆け巡った

「お前だけ」

男はメガネをとって床に置く。

唇にあった手を頬の方に移動していつて顔が近づいてくる

「ちよっ、なにすんー」

ふにゅ。

実際、そんな音が出るはずもなくただ、オレの頭の中に響いた。
最初は長く、ただ触れてくるだけだったのに、だんだん舌が口に進
入するようになってきた

「やめ・・・」

「口、ちよっと開けて」

人の話を聞けッ！！！！！！

つか、まだ出逢って数時間の見知らぬ・・・まあ同級生になるけど
そんなやつにキスされるなんて！！
しかも男！！

これじゃあまるで

この前アネキが送ってきたあの《ホモ》小説と同じだねーか！！！！！！

「オレにキスされてて考えごとしてるなんていい度胸してる」

「んんっ・・・」

角度を変えて舌を入れられる

甘い疼きが体に伝わって、男はオレのズボンに手をかける

「やだっ、なにすんだよ」

「なにって・・・色々？」

色々？じゃねーしッ！！！！

「大丈夫、気持ちよくしてやるから」

大丈夫でもねーよ！！！！

オレはジタバタと抵抗するが、力でねじ伏せられる
そうしてるうちにスポンにあつた手がチャックを開ける

サーっとオレ自身が冷たくなるのが分かった

ヤバイヤバイ！！！！このままじゃ童貞の危機だ！！！！
ヘルプみー！！！！！！！！！！

出会い + 3

「やだっやめろっ」

無駄だと思っけてもオレはジタバタと抵抗する。

鬱陶しくなつたのか、男はオレの足を持つて器用に空いている手でネクタイを取つてオレの足に縛り付けた

本格的にやばい。。。

「オレはお前が寒そうだったから入れただけなのに、なんで・・・なんでこんなことされなきゃなんねーんだよ!!!!!!!!!!」

「オレの名前知らない罰。」

「んなもん知るか!! オレ来たばっかだぞ」

男はじつとオレの顔を見つめる。
何故か、オレの顔がが熱くなる

黒い瞳が不意に揺れた

「じゃ、今から知って。オレはどんな奴なのか、どんな性格してるのか」

ちゅっとオレの手をとって甲にキスする

そのまままた、オレの顔に男の顔が近づいてきて

カステラー番電話は二番

これこそMK3って時に、軽いメロディーが流れて男の動きがぴたっと止まった

発信源は男のケータイからで、めんどくさそうにオレにのかっていた体をどけて電話に出た。

まあとにかく・・・

たすかったあ！！！！

もしもあのまま事が進んでいたら一生トラウマになってたかもケータイに電話してくれた人に感謝！！！！

オレは足にしばってあったネクタイを外そうと起き上がった時
電話が終わった男がニヤリと笑いながらまた近づいてきて、オレの
耳元で囁いた

「同じクラスになれるといいな」

「なっ！！！！」

誰がっなるか！！と言おうと顔を上げると、また男に口を塞がれ、
今度は甘い液体を飲まされた。
甘さのせいで頭がクラクラする

「どーせお前のことだから騒ぐだろうから、コレで寝てて」

「はい？」

あ・・・なんか目の前がかすんできた
ねむ・・・なんでだろ

「ありがとう、少し熱取れたと思う」

ちゅつとまた軽くキスされる

オレはあまりの眠たさにぼーっとされるがままになっていた。

「オレの名前

だから」

なに？聞こえない・・・あ・・・眠い

なんか目の前が見えなくなってくる、結局・・・名前なんだよ

「あれ？寝ちゃってる。じゃ名前わかんないままか・・・。まっ
いか」

寝てないっの。

てか、本当に名前なにさ！！！！

「じゃあ、また明日。アリベデルチ」
さようなら

男は最後にオレになにか言っただけで聞こえなかった
そして、オレは深い眠りについた

*

頭がガンガンする・・・。

絶対アイツのせいだアイツが眠り薬なんか勝手に使うからだ

会ったら血祭り決定。。

イライラとムカムカを抱えたままオレは学校へ向かう。

右手に地図、左手にカバンとなんとも奇妙なかつこうのオレは案の
定、登校中の他校生に変な目で見られた。

「い、ここがオレの通う学校う？」

空いた口がふさがらない。

いや、だってさ目の前にお城のような校舎が立ってたら誰だって驚くでしょ？

オレは右手に持っていた地図をしまつて校舎内に入ろうと校門をくぐろうと一歩を

踏み出した……はずだった。

「きゃあああ……！……！^{ツバキ}椿くんよ！……！……！」

は？

そう思った次の瞬間、ざわざわとさっきまでざわめいていた辺りが

静かになり、道の真ん中が誰かが通るように空いていた。

なにになに！？なんか通るのかよ？

てか、これって空けるべきか・・・？

なにがなんだか分からず立ち尽くしているオレはおどおどしていた。

「君、早くどけたほうがいい」

「え？」

ぐいっと、どこからか手が伸びてきて、オレを道の真ん中から引きずりだしてくれた。

出会い + 4

「あ、ありがとう」

オレはぺこりと頭を下げる。

助けてくれた、いかにも優等生ですって感じばメガネくんはメガネをくいつとあげるとため息交じりに言った

「君なんでどけないわけー？一年登校してれば分かるでしょ」

「え？なんでオレの学年知ってるの・・・」

「ネクタイの色が緑色だから。・・・君そんなことも知らなかったの？」

いかにも呆れたって顔で見ってくるメガネくん。
オレはむっとして言い返した

「んなこと知るわけねーだろ。オレ、今日初めてこの学校に来たんだから」

「へ？」

きよとんとメガネくんはオレを見つめる。
数十秒後、オレの正体が分かったらしく、ぼんと手をついた。

「あー・・・悪い。」

「別に。ねえそれよりなんなのこの道」

「ああ。君、今日からこの学園に通うなら知つといたほうがいいよ。
口で説明するのはめんどくさいから、見ててよ」

顔に似合わずめんどくさいと言っなよメガネくん。

普通、そこはきちんと分かりやすく教えてくれる所でしょ？！

てか、この学校がどうなってるの？まさか、実は超金持ちが通う学校で、四天王的な人たちがいて特別あつかいされてるとか・・・

まさかこんなアニメチックな話があるはずないよな！。

「この学園には四天王と呼ばれるやつらがいて」

ええ！！！！まさかの四天王登場！？・・・本当にあるんだ。
てことは、かなりの美形とか？いやいや、まさかそんなに都合のいい話なんて

「「「「椿さまアアアアアアアア！！！！！！！！！！」」」」

あるんですね。

いや、オレ別に四天王の一人の顔見てないよ
でもさ、このキャピキャピ声聞いてれば大体わかるでしょ。

さあどんと来い！！オレもうなにも驚かないぞ！！！！！！

「コイツがその一人」

メガネくんは嘲笑しながらすつと指さした
オレは必死に見ようとぴょんぴょんと157cmの小さい背で見ようとする。

でも、ココは男子校。普通の高校生が通っているわけで、オレより

でかい奴がわんさかいて前が見えない。

そんなオレの姿を見かねたのか、メガネくんは前にいた数人の男子に話かけ、なにかを交渉しはじめた。

数分後、交渉は成立したらしく、あっさりと前をどけてくれた。

「ねえ、なんで男子なのに男子にキヤーキヤー言ってるの？」

「みんなあこがれてるからだよ」

「あこがれ？」

「そ。君もじきに分かるよ」

不意にキヤーと言う声が大きくなってきた。

煩くて耳を塞ぐと、メガネくんは苦笑いして、道の方へ視線を移した

つられてオレも視線を前に移すと、人だかりの中に今一番見たくない相手が立っていた。

昨日と違い、ふんわりと茶色の髪がなびき丁度いいところで分けられていた。

ニコニコと周りの人に手を振り、昨日のオレ様口調とは違い、いかにも有名人ですって感じの話かたをしている。

とたんに、昨日の羞恥心がムクムクと膨れ上がってきた

「・・・あの。アイツの名前なんて言うの？」

「アイツって・・・知り合い？」

「まあ一応」

初対面で襲われて、童貞の危機でした。なんて言えるわけがない

「ふうん。ま、いいや。君いかにも椿のタイプだからね」

「ツバキ？」

「そうそう。アイツの名前は月並椿^{つきなみつばき}って言うんだ。」

「じゃあアンタの名前は？」

ぽかんとするメガネくん

「まだ言ってなかったけ？」

「うん」

「元紺俊輔だよ。もとこんしゅんすけよろしく」

ニコリと笑いかける俊輔はいかにも優等生ですって感じ。
オレも少しあんな感じに笑ってみたいとあこがれる……。

「君の名前は？」

「えっと、ふじおかりよう藤岡涼！！同じクラスになれるといいな」

「え……？」

「俊輔って頭いいだろ？そーゆうやつ友達にいいなーって」

「涼？あんまりこの学園でそんなこと言わないをうがいいよ」

「え？なんで？」

「いや……あの……なんでもない」

変な俊輔……なんかあんのかな？

ぐるぐると色々なことを考えていると、不意に頭にこつんと何かが当たった

「いつてエエエエ!!!!!!」

痛みに頭を抑えると、クスクスと笑う声が聞こえる。
キツと睨んで顔を上げると、昨日の男・・否。椿が立っていた

四天王サマご登場！！

優雅に高級車の中から現れ、他行の女学生にキヤーキヤー言われてさっきまでオレより遙か彼方に居たのに

なんでオレの隣にアイツが立ってんだよ！！

オレはさつと俊輔の後ろに隠れる。

ベーと舌を出して挑発すると、俊輔は笑った。

「なんでアンタがここにいの？」

「涼の姿が見えたからついね。あ、オレの名前分かった？」

「・・・椿だろ？」

「ご名答」

満足そうに微笑むアイツ。

こっついう笑顔を世間では『キラースマイル』って言うんだよな。

「そーいえば」

アイツは俊輔の後ろに隠れているオレの腕を無理やりひっぱると、耳元に顔を近づけて囁いた。

かぁと自分の顔が赤くなるのが分かる

「っ！！なわけねーだろっ！！！」

「あれ？そーだったけえ？たしか涼の体はきちんと反応してたよおな」

「言っなアアアアアア／／！！！」

ポカポカとアイツの体を叩いて反抗する。

「しかも、随分俊輔と仲良くなったみたいだし」

「え？俊輔と知り合いなの？」

オレは俊輔を見ると、イヤそうな顔をして俊輔がうなずいた。

「一応・・・知り合い程度で」

「ひどい言い様。仮にも会長と副会長の立場なのに」

は？

まてまてまて・・・。

「知らないよそんなの。椿がかってにオレを副会長に推薦したただけだろ」

「だってホラ、俊輔頭いいじゃん。幼馴染だし」

「幼馴染関係ない」

幼馴染？副会長？

話の飲み込めないオレは場違いな質問を一つ。

「あの・・・お二人の関係は？」

「「腐れ縁で、この学園の四天王^{せいとかい}!!!!!!」」

なるほど。この学園は四天王〓生徒会役員つてことですか。

あ、でもそうになるとアイツはともかく俊輔も四天王つてことかー。

俊輔も・・・

俊輔も・・・

しゅんすけ・・・もあ!?

「あれ、まだ涼に言ってなかったの?俊輔」

「だってオレ四天王のつもりないし。しかも、転入生にそんなこと言ってもしょうがないー!!!!!!?」

ふらりと視界が揺れる。

あれ?この感覚どこかで・・・。

びっくりしてオレに手を伸ばす俊輔

それを振り払って、オレをうけとめたアイツ

考えるヒマもなく、オレは意識を失った。

四天王サマご登場！！（後書き）

学校の始まるタイミングを失った福吉なのでしたー。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6270e/>

オレとうさぎと時々アネキ

2010年11月2日01時51分発行